校内研究会　9月11日

中学年分科会授業提案

第３学年　道徳　主題名「もっとわかりあえば」　　2-(3) 友情・信頼

資料名　貝がら　(学研　東京都版)　　指導者　　岡部　彩

授業の流れ

1　友達になったきっかけについて思い出す。
2　「貝がら」を聞いて話し合う。
3　友達とのかかわりについて考える。
4　教師の説話を聞く

協議会

＜分科会提案＞

ねらいとする価値にせまるために、主人公に焦点を当てた発問で授業を構成し、児童が自分のこととして考えやすいようにした。また、児童の思考を深めるために、自分の言葉で発言するように促すなど、教師の補助発問を工夫した。そして、終末に友達のよさを感じられるスライドショーを上映し、友達をもつよさを感じられるようにした。

＜自評＞

〇３年１組
- 資料のよさを再確認したが、きりかえし、ゆさぶりが難しかった。
- 今日の授業に向けて、板書や発問について話し合った。

〇３年２組
- 「おさえたいところ」「出させたい答え」にとらわれすぎて、きりかえしが多く発問の意図がぼやけてしまった。そのため、内容確認と前段の発問に時間をかけすぎてしまった。
- もっと子供とやりとりをする中での感覚や流れを大切にすればよかった。
- 終末は自分たちが映るスライドショーを見ることで、友達のよさを感じ取ってほしかった。

＜協議＞

- 補助発問を多くし、ゆさぶりをかけることが出来ていた。子供たちは発言やハンドサインなどで積極的に授業に参加する姿がうかがえた。
- 補助発言でゆさぶりをかけた一方で、主発問や一番伝えたかった所が曖昧になっていた。スライドショーを見せる時に、めあてをもたせることが大切。
- 初任二年目で時間内に収まり板書もきれいだった。先生の授業に対する一生懸命な姿勢が子供にも伝わり、雰囲気をよくしていた。

指導・助言　　東京学芸大学教授　　永田 繁雄 先生

〇本日の授業について（研究主題　関わりあい高め合う子供の育成）
- 友情をテーマにしながら、授業の学び合いの場面からも友情が見取れ、二重構造となっていた。
- 教師が用意した一つの答えに誘導するのは、教師の解釈に導くことであり、児童の自分の考えではない。その点、カードを最低限の発問にしぼり、児童の言葉でまとめており、すばらしかった。

〇道徳教育を推進して行くにあたって
- 「不易と流行」という言葉があるが、変化していくことで不易が生まれる。不易のために、常に変わり続ける＝流行が重要である。
- 道徳の特質は「子供の内面からの自己の生き方の表現と追求」にあり、様々な場面や意見に触れ、自らの意見をもつことに重きを置く。その特質こそ「流行の中の不易」である。また不易に迫る方法は常に改善されるべき流行であり、ニュートラルな視点に立った授業改善が求められる。

〇「しなやかな道徳」を行っていくために
- 授業を行うにあたって、子供が確かな共感的追求をしていくために、「形」ではなく、授業の導入・後段や資料の活用の工夫など「型」を考えていくことが大切。
- 授業づくりや指導技術を改善するために、発問の大きさ（場面＜人物＜資料＜価値）を変えたり、発達段階に応じた指導をより柔軟にしたり、子供の学びを促す目的で日々取り組む事が必要。